

サルヴァトーレ・ファルボ・ジャングレコ

Salvatore Falbo Giangreco

フアルボについて

サルヴァトーレ・フアルボ・ジャングレコは今日伊太利に於ける最傑れたマンドリンオーケストラ曲作家である。彼の「田園組曲」「西班牙」「抒情的間奏曲」等は吾々の永久に忘るべからざる作品である。此稿は彼が「イル・ブレットロ」誌第七年四號に寄せたものであつて、編曲者へ其執るべき道を教へて居る。

オルケストラ・ア・プレツトロへの編曲に就いて

一體私は編曲と云ふものに信用を置かない。ワグナーのものなど殊にそうだ。ワグナーなどの精神は非常に廣く、深く又力強いものでそれは到底グランデ・オルケストラ以外の他の器樂合奏に移植する事は出来るものでない。殊に之をオルケストラ・ア・プレツトロに移植せんとする場合、プレツトロ族の樂器の表現能力の程度や又オルケストラ・ア・プレツトロが全く持有な零圍氣をその生命として生きて居ること、又當然生きて行かねばならない事などを考へるとき更にこの感は深いのである。

併しいくら立派に實際的に之に確證を與へても充分の同意を得る事が出来ないし又適當な分野を制限したいと云ふ考へに對しても何等同意を得ることの出来ないのは困つた事である。けれども言葉の場合に於ける如く、壯大な大理石造りの建物の様

な構造をもつオルケストラの變曲に實際當つて見れば、到底之に對して同意せずには居られなくなる筈である。近代のオルケストラが誇りとする金屬管樂器の莊重な音調や木管と絃樂器の悲壯な音色やその他の種々な音調の驚くべき表現を、吾々のエストウディアンテナに於ては唯貧弱な代用を見出すに過ぎないのだ。

吾々は必要上オルケストラ・ア・プレツトロに繪具板の使用を廢した。そしてその結果として吾々は更に合金をも廢しやうとするのだ。配合のみを唯一の色彩とする畫筆を以て光りと音色の盡きる事なき變化に富んだ繪を作り出す方法があるだらうか。

殊にそれが調合又は單に模倣の出来る様な色彩とは全く様式の異つた色彩である場合は如何であらう。

今暇りにバレストリーナの聖歌をオルケストラに編曲を試みるとする。我々は前の場合とは別な意味であるが、而も更に重大な問題となるべき同様な誤謬に遭遇す

る。非常に豊富な色彩をもつた大オルケストラと雖も、肉聲のポリフォニアの片影をも模倣する事が出来ないと云ふ事を明かに認め得るであらう。

然らば、各音楽機關は各個の色彩能力の豊富さ許りでなく、それに伴ふ音響の強さによる特有の表現力の度に於て各々個有の性質を持つて居ると云ふ事は事實である。

他日音楽界のみならず非音楽界に於てもこの大眞理が充分に徹底し理解される時が来るであらうか。

それは藝術のため之をトするより外はないのであるが、現在吾々が編曲の眞中に生活して居るのだから、今之を豫言することは適當でないと思ふ。私はエストウデアンティナが他の音楽の力を借りる事を絶対に排斥したくはない。それでこの場合エストウデアンティナに取つて更に豊富な且適當な分野は音楽の最も近代のものか、或は四部が常に重要部分となつて居る古風な總譜表のそれである。これとて

も非常に困難な縮寫であるに違ひない。併し吾々は輕視する事の出来ない音色の特異と云ふ點に於て最上の筆觸と調和を持つて居る。吾々マンドリニステイは更に適當な分野に於て、又更に論理的な様式によつて、更に、充分な熟慮に相應しい確實なる結果をもつて自己を表現する事が出来る。

けれど優越の軍扇は常に原曲に興へられる。故に若しオルケストラ・ア・プレットロが大藝術、眞の藝術の實現に務めんと欲するならば、この道よりして優越を争はねばならぬ、編曲と云ふものは要するに燒直しであり犠牲となるものにとつても、又編曲を行ふものにとつても共に損失となるべき篡奪の行爲である。